教育新聞　平成27年11月19日　掲載記事

（木曜日）　教　育　新　聞　（第３種郵便物認可）　第3403号

ＩＣＴの活用を通じて探究的協働的な学びを実現

eポートフォリオで学習評価

課題解決型の独自学習を展開

大阪府立東百舌鳥高校
（公財）パナソニック教育財団特別研究指定校

（公財）パナソニック教育財団の今年度の特別研究指定校に選ばれた大阪府立東百舌鳥高校（牧野浩二校長、生徒数985人）は、今夏から25の全普通教室に整備した電子黒板機能付きプロジェクターとタブレット端末を用い、eポートフォリオシステムに蓄積された学習活動を評価する「アクティブ・ラーニングの実践と評価」の研究を深めている。生徒たちが協働して校内の課題を発見し解決を目指す独自学習を実施。より良いフィードバックや相互評価につなげるラーニング・マネジメントシステムの運用や紙版でのポートフォリオ活用も進めている。

生徒食堂の利用率高めるアイデアも提案

21世紀をたくましく生き抜く生徒たちを育むため、現在、主体性、協働性や問題解決力育成に向けたアクティブ・ラーニングの実践が強く求められている。

同校は、今年度の同財団の特別研究指定校として、これまで模索を続けてきたICTを活用したアクティブ・ラーニングの実践研究をさらに深めている。

学校独自の学び「マルチメディア」では、昨年から「東百舌鳥イノベーションアワード」と題した問題解決学習を開発、スタートさせた。この学習は、生徒たちが校内を巡り、それぞれ課題を発見するとともに解決策を検討し、発表するもの。グループで普段の学校生活を思い起こし、実際に校内を歩き回りながら、課題を見いだしていった。

課題解決の話し合いでは、校内美化の掃除を、イベントを交えて楽しく行うなどのアイデアが報告された。

授業を見つめた勝田浩次教諭は「基本的に生徒の自主性に任せたが、何も言わなくても、課題を明確化するためのアンケートなどを自主的に作成し、集計して、自分たちなりの解決策を見いだす姿が印象的だった」などと話す。

各グループのプレゼンテーションは、生徒たちはもちろん、牧野校長や多くの教員が見守る中で実施された。生徒食堂に着目したグループは、生徒アンケートなどを行い、その利用率の低さを課題に克服策を追究した。アンケート結果から見えた「メニューの乏しさ」という問題を見据え、「魅力的なメニューをもっと増やそう」と、生徒たちが授業の調理実習も生かし、数多くの献立を増やすなどのアイデアが報告された。

授業を見つめた勝田浩次教諭は「基本的に生徒の自主性に任せたが、何も言わなくても、課題を明確化するためのアンケートなどを自主的に作成し、集計して、自分たちなりの解決策を見いだす姿が印象的だった」などと話す。

また選択科目「実用英語」では、英語の発言・表現力の向上や4技能の向上、国際的視野を広げるためにタブレット端末を使用した「英語による海外旅行コンテスト」のプレゼンテーションを実践した。

紙とICTのポートフォリオを相互利用

勝田浩次、宮本晋一、北野賢司の各教諭は、このようなアクティブ・ラーニングの模索を続ける中で、生徒主体の問題解決型学習の経過や成果を適切に見取り評価する必要性が一層高まったと振り返る。

唯一の正解を問う試験の評価と違い、アクティブ・ラーニングでは、一定期間の学びにおける問題の考え方や試行錯誤などに価値を置く「学びの可視化」が重要になる。

そんな視点から、さまざまなアクティブ・ラーニングの評価をICTを活用して進めようと構築した仕組みが「ラーニング・マネジメントシステム」。今夏から設定と運用をスタートした。

同システムは、同じく今夏、電子黒板機能付きプロジェクターとタブレット端末を整備し、同端末を駆使した学びを進めるための「アクティブ・ラーニングルーム（ALR）」などを活用して、生徒の学習履歴の蓄積や教員のフィードバック、生徒同士のコメント、小テストの実施や蓄積などを簡易に進められるようにしている。

主に1年生「教科・情報」と3年生「総合情報」内「マルチメディア」の学習の中で活用。共同学習時の成果や各時間の学びの様子などをeポートフォリオとして記録できる。

一方、問題解決学習のプロセスを見据えた評価は、同システム開始以前から、紙のワークシートを使ったポートフォリオで、今春から取り組み始めていた。ワークシート内には、毎時間の学習内容や、教員が「学んで成長したことがよく伝わってきます」「学習への思いや理由は」など4項目の学習コメントをつづる欄も設けている。8時間分の学習に沿った記録が残せるような作り。その他にも、生徒によるコメント欄を設け、学びへの取り組みや思いなどを示し、振り返りができるようにしている。

現在は、ICTと紙のワークシートの2通りのポートフォリオを兼用して、生徒の問題解決学習などを励まし見守っている。

最終的には、ICTに全面移行する予定で研究を進めている。

取り組みの経緯と成果を語る教員ら

全教員でアクティブ・ラーニングの具体を確認

一連の取り組みは、ITトータルプラン委員会のCTを軸にしているが、単にICT活用だけに目を奪われない実践研究にした点も特徴。そのため、選抜教員が「より良い教育のあり方」を共通目標に「アクティブ・ラーニングの具体像」「ICTと手書きを軸にした従来の学習の利点、課題、実施場面」などを議論。全教員の確認や共有を通じて適切な学習の位置付けも大切にした。

同校の教師たちは、これまでの実践から「生徒自身の課題追究の学びで、これまで見えにくかったさまざまな能力が発揮されている。素晴らしい潜在能力に驚いている。

同校／℡072（23）5）3781。